

## 浅野建二編『日本民謡大事典』

内田るり子

日本民謡大事典は編者浅野建二氏の多年にわたる日本民謡の研究の成果を結集したものの一つの仕事として、編者の広く且深い学識と、民謡に対する限りない愛情をもつて編纂されたものである。

編纂の動機として、民謡が古代から日本の基層社会に口承されて、信仰の唄として、或は農耕を中心とした労働の唄として、歌いつがれて来た。しかし長い間、たんに民謡は『漂える声』として、歌うよるこび、聴くよるこびをもっぱらとして放置されたために、詞曲ともに変化するにまかせ、古民謡は消滅の一路を辿るのみで、これを正確に書き留めて後世に残す努力は殆んどなされなかった。ただ、わずかに江戸中期の一部の文人・好事家によって記録された『延享五年小歌しやうが集』（寛延元年成）とか『山家鳥虫歌』（明和九年刊）・

『鄙廼一曲』（文化六年成）などの文献によって、当時の民謡歌詞についての知識も得られ、現行民謡との関係がすこしく推測される程度で、民謡の系譜や、歴史の変遷などは考察する資料が不足で、学問的研究にも困難を来している。より積極的に民謡歌詞の蒐集が行なわれるようになったのは明治以降のことで、雑誌『風俗画報』（明22〜大5）の連載記事をはじめとして、大和田建樹編『日本歌謡類聚・下巻（統帝国文庫）』（明31）・前田林外編著『日本民謡全集（正・続）』（明40）・童謡研究会編『日本民謡大全』（明42）・文部省文芸委員会編『俚謡集』（大3）・高野斑山・大竹紫葉共編『俚謡集拾遺』（大4）などが相ついで刊行され、別に各府県・郡單位の民謡も世に出るようになった。とくに近年は歌詞のみでなく採譜による楽譜をも著した町田佳

聲執筆の『日本民謡大観（全九巻）』（昭19〜25）や、武田忠一郎執筆の『東北民謡集（全六巻）』（昭31〜42）のごとき大著も完成され、民謡の学術的研究は一段と躍進した。

一方近年は、日本の中で郷土民謡および民俗芸能に対する関心と愛好熱が著しく高まり全国的に、これら伝統芸能の保存・育成を強化しようとする運動が活発になったが、他面マスコミの影響をうけて、ステージ民謡として旋律も歌唱法も歪曲わがまぐされて普及され、国民の大多数は必ずしも伝統的な民謡の本質、歴史的な系譜など正しい認識を得ていない現状である。それ故に純粋な民謡に対する真の理解を国民に与え、民謡の学術研究に対する豊かな資料に資すべく、近年の日本歌謡研究の充実発展の成果をふまえて、民謡の原点にたった編集の方針の下に、五年の歳月をついやし、鋭意全力をつくして完成されたのが、この立派な大事典なのである。

大事典は、主として日本民謡およびそれに附帯した民俗芸能に関する必須の項目をえらび、必要にして十分なすぐれた解説を

施している。事典の規模としては大別して総説編と本文編から成り、巻頭に「曲目分類別一覽」「曲目府県別一覽」巻末に「歌出し索引」「総索引」をそえてあって、あらゆる角度から引用しやすいように周到な配慮がなされている。

総説編では「民謡の発生」「語義と属性」「内容分類」「伝播と定着の問題」「特質と現代」について編者の卓見が示されている。

「民謡の発生」については（うたふ歌）が（よむ歌）の母胎をなしたことを明らかにし、歌とおどりの一体性によるリズムの根源、宗教歌、労働歌、歌垣など原初的な問題についてのべている。特に人間の歌う行為の認識の高いことは、編者自身すぐれた民謡の歌唱能力をもたれることから生まれたものだろう。「民謡の語義と属性」について、編者は「民謡とは、元来、地方の民衆集団の間に自然発生的に生まれ、永い間伝承されていくうちにその郷土の生活感情をもっとも純粹に表現した素朴な歌謡である」と結んだが、特に「素朴性こそ民謡の本質であり最大の魅力というべきもので

ある。それは人間生活の底を流れる真実味であり、積極的な創造力の源である」という見解に心を打たれた。「民謡の内容分類」については従来の分類案の中から特に町田佳聲案と柳田國男案を紹介し、「民謡の伝播と定着」には、江戸時代以来、門付け芸人・船乗り・飴売り・商人・木挽師・酒造り・杜氏などによって伝播された経路について述べ、特に「新保広大寺」系統、「ハイヤ節」系統、「追分」系統の伝播と定着について注目している。最後に「民謡の特質と現代」の項で結論として、「民謡」を単に保存・育成するのみでなく、その中から日本人のこころとか、リズム感を発見することによって、日本人の生きる力と自覚とを与え、生命の一つの源泉となるような方向に資したい」と、民謡のあるべき方向について重要な示唆を行っている。

本文では見出し項目として、民謡一般の分類語彙、各地民謡曲目、民俗芸能曲目、童唄曲目、人名、書名のほか、類型歌詞、労作用語、音楽用語など二千四百三十七項目があげられている。民俗芸能・童唄などは民謡に関連あるものに限って解説されて

いる。

本文の解説に引用・参照した文献は『梁塵秘抄』『閑吟集』『田植草紙』『宗安小歌集』『隆達小歌集』『女歌舞伎踊歌』『伊達家治家記録踊歌』『寛永十二年跳記』『吉原はやり小歌総まくり』『糸竹初心集』『淋敷座の恋』『御船唄留』『御船歌枕』『松の葉』『延享五年小歌しようが集』『春遊興』『山家烏虫歌』『艶歌選』『弦曲粹弁当』『鄙曲一曲』『麓曲塵』『浮水草』『巷謡篇』『小歌志集集』『小唄のちまた』『近世文芸叢書』『俚謡集』『俚謡集拾遺』『日本歌謡集成』『民俗芸術』『佐渡の民謡』『全長崎歌謡集』『島根民謡』『東北の民謡』『民謡研究』『日本民謡集成』『郷土民謡舞踊辞典』『日本民謡大観』『若越民謡集』『岡山県の盆踊と民謡』『日本民謡集』『琉球の民謡』『九州民謡集成』『近世歌謡集』『三重県民謡集』『東北民謡集』『日向民謡』『南日本民謡曲集』『日本民謡集（岩波文庫）』『大分県の民謡』『続日本歌謡集成』『奄美民謡大観』『日本の民謡』『広島県の民謡』『日本民謡辞典』『飛弾の民謡』『日本庶民文化史料集成・第五巻』『福島の民謡とわ

らへ歌』『日本民俗芸能事典』『日本歌謡研究資料集成』等の多きにのほり古今の参考文献資料を渉猟しつくして、網羅しているが、これによってもいかに本事典が確実な学究態度と厳密な考察によって編纂されているかをすることが出来るだろう。

また執筆に関しては編者をはじめ臼田甚五郎・友久武文・小笠原恭子・山路興造氏等の著名な研究者のすぐれた解説は云うに及ばないが、特に地方在住の民謡研究者に執筆協力を依頼し、その土地に存在する民謡の実感にあふれた、且フィールド・ワークの成果をもふまえた記述は特筆に値したと思う。その意味で、南島の研究者である私には、新里幸昭・久保けんお・池宮正浩氏等の解説が心に残った。

最後に私が音楽の研究者である立場から、この事典による恩恵についてのべてみたい。

第一には豊富に文献が紹介されていることである。先述した引用・参照文献はすべて内容の紹介解説が行われているが、それのみならず、民謡に関する研究書・解説書を網羅した学会誌や、地方誌の目の届き

にくいところまで項目において内容紹介を行っていることが、将来の研究の上で本當に有難いことであると思う。

第二には民謡それ自体に関する解説内容の豊富さである。民謡の歌詞と詩型・類型歌詞・系統分類・転化・機能・歌い方の比較・労働歌の作業方法・民謡歌手名など。

また民俗芸能に関しても芸態・曲名・歌詞・踊り方・楽器に至るまで、それぞれ克明に記述されていて、音楽研究の上で重要なバックボーンはすべてこの事典から受取ることが出来るといっても過言ではないであろう。特に類型歌詞を集めて、その音楽の裏付け作業を行ってみるのも興味深いことであるし、系統分類によって、例えば新保広大寺系統のくどきが、どのように地域的

に広がりをもって伝播し、音楽的特徴が地域によってどのような変貌をみせ、或は共通性をもつのかなどと問題意識を発展させていくのも楽しい。音楽研究者には必須の事典というべきである。

以上『日本民謡大事典』の内容的な紹介を主として書評を行ったが、日本民謡大事典は実に民謡事典の決定版であり、民謡の研究者は勿論、民謡指導者、民謡愛好家の「知識の宝典」として座右におくことは、民謡の深い研究と正しい発展のためにかくことの出来ないことであると思う。編者の高い見識による壮挙の刊行を心から祝福したい。

(うちだ りりこ・国立音楽大学)  
(雄山閣出版・一八、〇〇〇円)

## 浅野建二編『日本民謡大事典』

成田 守

毎週どこかのテレビのチャンネルを回すたびに〇〇民謡のど自慢とか、あるいはど

こかの放送局が各地の民謡を放送し、民謡歌手が民謡の指導をしているのを見聞す

る。毎年毎年民謡人口ともいえるものが確実に増加していることだけは確かで、民謡教室に通う人々とカラオケ歌手をふやしつのである。このことは民謡の大衆化であると同時に画一化をもうがしていることにもなる。節回しの難解な歌は専門の歌手のものとなり、安易さにも移行していくことになる。全国の歌い易い歌が普遍化していることになる。民謡の流行ということからすれば、喜ぶべき現象なのであるが、その逆にもつながることになりかねない。自分のことをのべて恐縮なのだが、数年前に越後湯沢で仲間と遊んだことがあった。好きな人もいたので三味線弾きを呼び歌ったのだが、小生の歌う「弥三郎節」と三味線とがどうしても音が合わない。結局は仲間からお前は下手だといわれ、上手に音色に合わせて歌った仲間がうまいのだということになる。よく聞いてみると毎週民謡教室に通っているのだという。自分が歌った歌い方は幼い頃から聞いた通りのつもりで歌っていたつもりであるし、自分では決して音痴ではないつもりだったのだが、他人からみれば下手だということにな

るらしい。以来、民謡を人前で歌うのもやめたし、正調〇〇節なる歌についても無視することにした。

本来歌というものは歌う人によって千差万別があつてしかるべきであり、その時その場によつても違はずである。栃木の大田原の者が津軽の「弥三郎節」を三味線に合わせて上手に歌つたと評価するのが無理なのだと自分で決めるしかない。人の耳によく響き美声であれば上手だといわれ、楽器のテンポに合わないのは下手ということであれば甚だ不愉快な思いしか残らない。仕事唄を三味線太鼓に鉦を叩いて歌えるはずもないし、自分が生れ育つた土地の歌を他所の土地の者に下手だといわれてみれば、何を基準に下手だといわれたのか悩むしかない。民謡にはその土地その場での特異性がありそれが郷土性といえるものである。民謡の隆盛とともにこの郷土性は急速に失われつつあるといつてよい。その地域独特の風土の中で生活感情をふまえた歌が、喜怒哀楽の表現の一部分として成立していったのである。それだからこそしみじみと心うつものとして受容されてきたので

ある。

さて、本書の眼目として編者はAはしがきVで、民謡や民俗芸能の関心と愛好熱の高まりの中で「全国各地において、これら伝統芸能の保存・育成を強化しようとする運動が活発化するようになったのは、はなはだ喜ぶべき現象に思われるが、他面これらの伝統芸能の中には、最近のいちじるしいマスコミ発達の影響を受けて、なかばステージ化されて普及するものが少なくないために、国民の大多数はかならずしも伝統芸能の本質とか歴史的系譜について、正しい認識と理解を得ていないのが現状である」と、前述したような危惧をのべていく。そして、A本論Vの一では民謡の発生として、感情のおもむくままに発した叫び声が「うた」の生まれる淵源であるとし、信仰記源説をとる。二、民謡の語義と属性では、その源義をのべつつも、明治以来の学校教育の場で唱歌の教材として外国民謡等の洋学面を採用したことの批判を適切にまとめ、属性として(一)自然性(二)伝承性(三)集団性(四)素朴性(五)郷土性の条件を充足したものが必要であるとす。このことは民謡の持

つ重要な特質であるもので、現状の民謡からは徐々にであるがこの条件を欠いていくものが出てきていることは確かである。三が民謡の内容分類で、これが本書の大部分を占めるものだが、分類別曲目一覧には  
△祝唄▽91△祭唄▽17△劳作唄・田唄▽51  
△劳作唄・庭唄▽52△劳作唄・海唄▽57  
△劳作唄・川唄▽16△劳作唄・業唄▽151  
△劳作唄・道唄▽49△劳作唄・その他▽11  
△酒盛唄▽351△盆踊唄▽242をあげる。その他に△新民謡▽27△古典歌謡▽20△流行俗謡▽4△童唄▽24△民俗芸能▽193の項目である。△新民謡▽以下は△童唄▽を抜きにすれば民謡とは正確にいえませんが、関連事項として挿入されている。四が民謡の伝播と定着、五が民謡の特質と現代である。ここでは主としてわが国の民謡の特質として五つあげ、①種類の多様性②古態を保存育成する傾向があり、労作業の効率化を高めるために人工的手段として掛声などを入れるたりする③本来もっていた使用目的から別の唄への転用される傾向がみられ、④各時代と場所によっては部調も曲節も変化するという。この民謡の特性があるからこそ各

地各様多種多様の唄が歌われ類型的な唄が残されていることになる。最後に編者は今後の民謡研究の課題として、祖先から継承した貴重な文化遺産を「能う限りこれを忠実に継承すべき責務がある」と結ぶ。それ故に本書の編纂意識としては、これらを総合的に考慮したうえで各項目を詳述していくことになる。各項目は二四三七にものぼり、各地の民謡集・研究書・概説書・研究者をも含む民謡大事典であるとともに、簡略ではあるが民俗芸能事典としての役割をも果せるように配慮されている。

編者が民謡の属性の中でのべているように、郷土の生活感情をもっとも純粹に表現したものが民謡だという主旨から、各項目にもこうした記述がみられる。曲目番号204糸引唄について「女の細い柔軟性のある右の指先で煮鍋の数个の繭から糸を引き出し、左手で糸車を回しながら行われる糸引の作業唄で、女の民謡である云々」と詳細に作業をのべるが、こうした記述は従来の事典にはほとんどみられない記述方法である。民謡のもつ生活感情を表現したともいえる。そして歌の由来・転用・現況・類歌

と記述している。ところが、こうした記述がともすると編者の感情表出として現われた部分もなくなはない。最上川舟唄「——確かに魅力的である」、最上川土搦唄「——であるのおもしろい」、藍葉棒打唄「——点がおもしろい」、秋田万歳「——の調べもおもしろい」などがみられる。これら編者の感情は事典ということからすれば不適切であるのではなからうか。また、秋保の田植踊（宮城県）や亀井踊（鳥取県）など、狭い地域内での踊り歌まで項目にはあるが、執筆者との係わりもあろうが、一部地域にかたよる傾向がないでもない。一県全般的なものとしてなら理解されやすいが、一地域の踊り歌ではない。たとえば、鹿児島県での田の神舞は歌も踊りもあるが記述に漏れるし、全国的に流行していた△鈴木水▽や△白井権八▽というような曲目についてはふれてもらいたかった。そして、さらに欲をいえば、項目中に多くの各都道府県の民謡集など記述されているのだが、府県別曲目一覧表の次にでも索引と出版物名をまとめてほしかった。

（なりた まもる・大東文化大学）